

“世界と地域を繋ぐ力”

を証明する称号

グローバル 創生推進士

GLOCAL INNOVATOR



グローバル創生推進士にボーダー（境界）はありません。
国内・海外の「地域」が私たちのフィールドです。全学部・
全学年の学生が対象です。

「地方創生推進士」から 「グローバル創生推進士」へ

過疎高齢化・人口減少など「課題先進県」といわれる高知県。高知大学では、地域への理解と愛情、地域で働きたいという志を持つ学生を育成し、「地方創生推進士」として認定してきました。称号を得るには育成科目18単位の修得が必要です。講義に加え、地域での実習、経営者や行政機関のもとでのインターンシップなど現場での学びを重視しています。2024年3月末時点で、合計274名の地方創生推進士が高知県・全国で活躍しています。

なぜ高知で「グローバル」なのか

そして近年、外国人技能実習生や外国人観光客の増加などによる多文化共生社会の進展すなわち、グローバル化の影響が、私たちの足下の高知県にも急速に拡大しています。グローバル化と、人口減少・高齢化といった問題が複雑に進む高知県において、地域レベルからの国際アジェンダ（ODGs等）の推進や諸外国の地域社会等との関係構築によって、「グローバル」と「ローカル」の双

方向的な視点から地域の国際化推進に貢献できる人材が求められています。そのため新たな挑戦として、高知大学では、「グローバル創生推進士」を立ち上げました。

「グローバル創生推進士」の人材像

「グローバル」はグローバルとローカルを組み合わせた言葉です。地方創生推進士に認定された学生が、国際的な視点から地域と協働し、国内・海外の地域課題の解決に取り組んだ証として、そのプロセスで育んだ「世界と地域を繋ぐ力」を証明する称号が、高知大学の独自認証である「グローバル創生推進士」です。

グローバル創生推進士育成科目は国内・海外の「地域」をフィールドにして、国際学生と共に地域で協働するという趣旨のプログラムです。同年代の世界の若者と共に地域に飛び込み、仲間とまみれ、地域課題解決に挑戦することを重視します。

称号を得るためには、地方創生推進士育成科目18単位の修得に加え、4単位のグローバル創生推進士育成

上の写真は 2023 年 2 月に実施したインドネシア実習より



日本



高知：世界と繋がる自分



台湾



台湾：「地方創生」最前線

インドネシア



インドネシア：子供達にインタビュー

高知の中の世界と出会い、 世界の中に高知を見つける

科目の修得が必要です。台湾、インドネシア、イタリアなど海外協定校と連携した国際プログラム等を正課科目として、高知県内で実施するえんむすび隊やインターンシップを準正課科目として設定しています。今

後、さらに正課科目・準正課科目を拡充していきます。
国内と海外のどちらからスタートしてもOKです。皆さんの興味関心から最初の一步を踏み出してみましよう。

「ここには何にもないからね。これは、これから皆さんが地域で何度も耳にする言葉かもしれません。私たちのフィールドは観光地ではありません。名所旧跡やインスタ映える飲食店・スポットは少ないかもしれません。しかし、そこには人々の暮らしがあり、自然と歴史を活かした産業が営まれ、そして地域の繋がりが確かに存在します。」

高知大生と国際学生が共に地域を理解し、地域課題解決に向けた実践を通じて、「何もない」から「ここにしかない」地域の価値や魅力を考えていきましょう。

高知の足下からグローバルを考える

高知の名物であるカツオのたたき。これを釣っているのはインドネ



高知のカツオ：漁業を担うのはインドネシア人

シアからの漁業実習生ということを知っていますか？
インドネシア人が高知のカツオ一本釣り漁を支えています。そのインドネシア人が母国でどのような暮らしや産業を営んでいるか、想像した

シアからの漁業実習生ということを知っていますか？
インドネシア人が高知のカツオ一本釣り漁を支えています。そのインドネシア人が母国でどのような暮らしや産業を営んでいるか、想像した



インバウンド観光：狙うは台湾人観光客。県内各地で誘致

ことはあるでしょうか。皆さんの食卓にもグローバルを考えるヒントがあります。
現在、国内需要が落ち込む日本では、全国各地でインバウンド観光（外国人旅行者）の誘致が繰り広げられています。2023年5月、台湾と高知県を結ぶ定期チャーター便が就航し、台湾から観光客が増えてきました。台湾の人々は高知のどこに魅力を感じ、なぜ高知を選んだのでしょうか？ ここにも「グローバル」な視点で高知の魅力を考えるヒントが広がっています。

国際共修から地域の国際化推進へ

グローバル創生推進士の育成プログラムは、高知大生と国際学生が共に地域課題解決に資する力を身につ

ける国際共修だけではなく、地域住民と協働することによる、地域の国際化推進も目指しています。

地域住民は、高知大生・国際学生の活動や意見に直接触れることで、地域にいながらグローバルな経験を直接体験することができます。これまでの実習地では「ヒジャブやハラル（イスラム法で合法なもの）への理解が深まった」「地域の魅力を伝えたい」「外国語で話してみたい」などといった声が地域住民から聞かれました。住民の意識変化を実感しています。

これらは、高知の足下から「グローバル」を考える一例です。国際学生、地域住民と学び合う中で見えてくる高知の課題や魅力について、「グローバル」な視点で考えてみましょう。



地域の国際化推進：安田町フィールドワーク

実習が豊富なカリキュラム 行動力等のアップを実感

学生の学びの評価は、学生自身の成長につなげるだけでなく、プログラム改善にも必要不可欠です。ここではSUIISLP（4ページ参照）で活用してきた「学びの評価」指標を基に学生の成長と変化を考えます。

台湾実習

対象者は2024年2月の台湾実習に参加した高知大生4名、千葉大生2名。平均点は「人にまみれる力」（事前13・1↓事後17・5）、「掘り下げる力」（10・0↓15・3）、「行動を起こす力」（10・1↓14・3）、「共に創る力」（12・0↓16・3）、「経験に学び、伝える力」（12・1↓15・3）と全ての項目で自己評価が向上しました（左図）。特に「掘り下げる力」で大きな向上が見られました。初めての海外実習という慣れない環境の中、地域を理解するための観察や議論を重ねた結果だと考えています。

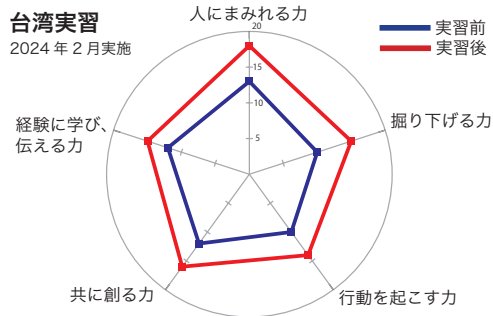
対象者は2023年8～9月の国内実習に参加した高知大生9名。平均点は「人にまみれる力」（12・3↓事後15・2）、「掘り下げる力」（10・1↓12・4）、「行動を起こす力」（10・0↓13・4）、「共に創る力」（12・2↓14・7）、「経験に学び、伝える力」（12・0↓14・6）と全ての項目で自己評価が向上しています。特に「行動を起こす力」で大きな向上が見られました。国際学生への通訳やフィールドワークなど、自らが主体的に行動を起こすことでコミュニケーションが図れ、チームワークが向上することを理解してくれたのだと考えます。

中、地域を理解するための観察や議論を重ねた結果だと考えています。

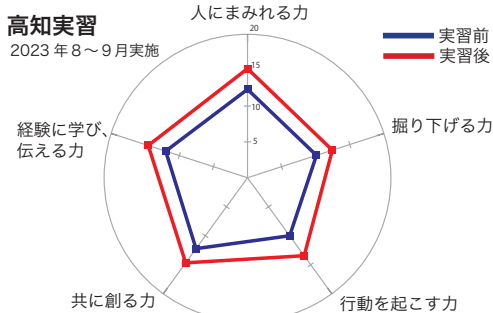
国内実習

対象者は2023年8～9月の国内実習に参加した高知大生9名。平均点は「人にまみれる力」（12・3↓事後15・2）、「掘り下げる力」（10・1↓12・4）、「行動を起こす力」（10・0↓13・4）、「共に創る力」（12・2↓14・7）、「経験に学び、伝える力」（12・0↓14・6）と全ての項目で自己評価が向上しています。特に「行動を起こす力」で大きな向上が見られました。国際学生への通訳やフィールドワークなど、自らが主体的に行動を起こすことでコミュニケーションが図れ、チームワークが向上することを理解してくれたのだと考えます。

自己評価に現れた実習の成果※注



台湾：国立高雄科技大学ガイダンス



安田町：浴衣を着て近所をご挨拶

MY STORY

海外の経験が高知で活かせる

地域協働学部2年生 ◇古谷 展久さん
ふるやのふひさ

2024年3月、グローバル創生推進士の第1号が誕生しました。国内実習と海外実習（台湾・インドネシア）を修得した古谷さんの経験をご紹介します。

最も印象に残っているのは、初めての海外実習となった「地方創生グローバル演習Ⅱ」です。協定校である台湾・国立高雄科技大学の学生と夜遅くまで、最終発表に向けた議論と準備を重ねました。英語を使った国際学生との交流では、どうしても言語の壁がある。限られた自分の語彙力で、相手への伝え方を工夫しました。

実習期間中は時間が限られていて、とにかくしんどかった（笑）。今、振り返ってみると、実習前の私は「地方創生」を人口減少という一側面しか捉えていませんでした。その対策も、どうすれば地域の人口が増えるかばかり。国内・海外の実習で国際学生とともに地域に向き合ったことで、人とのコミュニケーションが活きたと感じたことがあります。学部実習で地域誌『いなぶつく』の作成に取り組んでいます。その中で、地域住民と学生との間で地域への想いや表現方法（言葉やイントネーション）に違いがあることに気が付き、住民目線で考える大切さと、それを伝える工夫が必要であることを学生同士で議論することができました。

海外での経験が、今自分が立っている高知で活かされています。

台湾実習のフェアウェルパーティー（左手前が古谷さん）



※注：レーダーチャートの元となるアンケート調査は、国際プログラム SUII の「5 capabilities: 5つの力」を援用した。

地方創生推進士とグローバル創生推進士を目指すカリキュラム

グローバル創生推進士の称号を得るには、地方創生推進士育成科目 18 単位の修得に加え、
グローバル創生推進士育成科目 4 単位の修得が必要です。
国内と海外のどちらからでも修得可能。

地方創生推進士までの4つの phase

1st
phase

地域を「知る」

- 6 単位 ※必修科目を含む
・ 正課（共通教育）

2nd
phase

地域を「もっと知る」

- 4 単位
・ 正課（共通・専門教育）
・ 準正課（地域講座）

3rd
phase

地域と「会う」

- 4 単位
・ 正課（専門教育）
・ 準正課（えんむすび隊、地域交流）

4th
phase

地域を「体験する」

- 4 単位
・ 正課（専門教育）
・ 準正課（社長インターンシップ）
（高知市長インターンシップ）



地方創生推進士

地域への深い理解と愛情を証明する称号

グローバル創生推進士育成科目

2 科目以上かつ 4 単位以上を修得

共通教育

- ・ 「地方創生グローバル演習Ⅰ」（2 単位）
- ・ 「地方創生グローバル演習Ⅱ」（2 単位）
- ・ 「国際協働演習Ⅰ」（2 単位）
- ・ 「国際協働演習Ⅱ」（2 単位）
- ・ 「ベーシック国内サービスラーニング」（4 単位）
- ・ 「ベーシック海外サービスラーニング」（4 単位）
- ・ 「アドバンスド国内サービスラーニング」（4 単位）
- ・ 「アドバンスド海外サービスラーニング」（4 単位）

地域協働学部専門科目（地域協働学部学生のみ）

- ・ 海外特別演習（2 単位）

準正課

- ・ コラボ考房プロジェクト
（地域課題解決協働実践コース）（2 単位相当）
- ・ えんむすび隊（グローバル）（2 単位相当）
- ・ インターンシップ（グローバル）（2 単位相当）



グローバル創生推進士

“世界と地域を繋ぐ力”を証明する称号



日台連盟の調印式



SUII には大学院生向けのプログラムや共同研究もある

日台大学地方連携及社会実践連盟
（通称：日台連盟）
2021 年 11 月、国内 4 大学（高知大学、信州大学、千葉大学、龍谷大学）と台湾 6 大学（国立暨南国際大学、国立成功大学、国立中山大学、東海大学、国立高雄科技大学、国立台湾海洋大学）が「地方創生」をテーマにした学術交流、教育連携、産業振興に向けた新たなプラットフォームを発足しました。加盟校の取り組みは、ニュースレター（日本語・中国語）で配信しています。

Six-University Initiative Japan-Indonesia（通称：SUII = スイジ）
SUII は、四国 3 大学（愛媛大学、香川大学、高知大学）とインドネシア 3 大学（ガジャマダ大学、ボゴール農業大学、ハサヌデイン大学）が共同して教育・研究を進めるコンソーシアムです。実施する教育・研究プログラムのうち、学士課程（学部生）を対象とするのが「日本・インドネシアの農山漁村で展開する 6 大学協働サービスラーニング・プログラム」（通称：SUII-SLP）です。

国内外の多数の大学と連携 共同研究の強力な基盤

台湾、インドネシア、 そして高知で学ぶ 「地域」と「世界」の視点

※各実習の時期や期間、方法などは変更することがあります。
4月に実施するガイダンスに必ず参加してください（参加必須）。

ここまで読み進めてくれた皆さんは、「将来、国際協力の仕事をしたい」「国際学生と交流したい」「農山漁村の現状を知りたい」という夢や期待を抱いているでしょう。グローバル創生推進士育成科目は、全学部・全学年の学生を対象にしており、参加目的も様々です。

しかし、外国語習得や文化交流を主目的に設定したプログラムではありません。国内・海外をフィールドに、文化や宗教が異なる国際学生と共に、使用言語は英語という環境に身を置きます。

自分自身の体験と仲間と協働しながらフィールドワークを通して地域を考え、理解し、持続可能な地域づくりに何が出来たのかを考えるプログラムです。

また、国内・海外のどちらかではなく、国内と海外のどちらも体験することが出来る双方方向型プログラムという点が特徴です（原則、海外実習は国内実習を修得していることが条件です）。高知県で得た学びを海外でさらに伸ばすため、海外で得た言葉や文化の違いを高知県で活かす・深めることができます。

履修を希望する学生には、主体的かつ根気強く地域を探索する姿勢、国際学生と積極的に交流する姿勢、地域に対して敬意を持って接する姿勢が強く求められます。

グローバル創生推進士にボーダー（境界）はありません。国内・海外の「地域」が私たちのフィールドです。

JAPAN

日本



国際学生と 高知の未来を考える

科目例

「地方創生グローバル演習」
「ベシック国内サービスマーケティング」ほか

国内実習は、高知大学が所在し、皆さんが住んでいるここ高知県が舞台です。私たちが当たり前に暮らすこの高知県で、文化や宗教、考え方の異なる国際学生と共にフィールドワークを行い、改めて私たちの住む高知県について考えます。ここでは、2023年8月20日～9月4日（全16日間）に実施した国内実習の様子を紹介します。

二カ国の学生が高知へ

参加者は高知大生10名、台湾学生14名、インドネシア学生6名というバラエティーに富んだメンバーが集まりました。実習地は高知県安田町と黒潮町の中山間地域です。

プログラムでは、まず、地域を知ることから始まります。農作業や自然体験、郷土料理など自分の体験から地域理解を深めていきます。また、フィールドワークを通じて、「なぜ条件不利地で農業を続けるのか」「高齢者の「生きがい」は何か」「コミュニティ活動の運営方法」など、国際学生から矢継ぎ早に質問が出てきます。皆さんは、英語での通訳

さらには自分の意見を英語で返します。言葉の壁に阻まれて上手く伝えられない、積極的な国際学生を前にして自分の意見が言えないという経験もあるでしょう。国内実習で得た学びは、地元報告会等を通じて、自分たちの考えや経験を地域の皆さんにお伝えします。毎年、報告会では、別れを惜しんで涙する学生や地域住民と抱き合う姿が見られます。

こうした高知県にしながら国際的な視点で地域を考え、自分の意見を他者に伝える。それが国内実習で目指す「グローバル創生推進士」の学びの形です。さあ、国際学生と一緒に高知県の魅力について考えてみましょう！

安田町：鮎釣り体験



TAIWAN

台湾



台湾の「地方創生」を 五感で体験！

科目例

「地方創生グローバル演習Ⅱ」

「地方創生」という言葉は、日本では2014年から、台湾では2019年から政策課題に掲げ、人口減少対策や地域産業創出に取り組んでいます。

「地方創生グローバル演習Ⅱ」では、政治・経済・社会的背景を踏まえ、その地域の暮らしや産業、文化を理解するとともに、持続可能な地域づくりのための地方創生に向けて、何ができるかを考え実践すること、を目指します。

ここでは、2024年2月12日～2月21日（プログラムは7日間）にかけて実施した実習の様子を紹介します。

アイデアを専門家の前で発表

参加者は高知大生4名、千葉大生2名、協定校の国立高雄科技大学11名の、計17名でした。国立高雄科技大学の所在する台湾高雄市を拠点に、地域実践フィールドである屏東県林邊・同県東港を巡りました。

プログラムでは学生が現地のコミュニティ活動に参加して高齢化の現状とその対応を学びました。また、文化的建造物の活用、洪水被害の記録碑の建立・管理、



自転車地域を一周

水を巡る地域の物語



観光産業による雇用創出などを実践する人々の「現地の声」から地方創生を理解していきましました。

あるグループでは、地元男性（91歳）が語る「林邊は水が綺麗な土地だった」という言葉をヒントにして、清朝時代から残る歴史的住宅を拠点にした「水を巡る地域学習ツアー」を検討し、社会実践の専門家達の前で発表しました。

INDONESIA

インドネシア



インドネシア農山漁村を 自らの体験を通して実感

科目例

「ベーシック海外サービスマーケティング」ほか

インドネシア実習は、日本とインドネシアの6大学（愛媛大学、香川大学、高知大学、ガジャマダ大学、ボゴール農業大学、ハサヌディン大学）によるSUJI（SUJI-SLP）のもとで実施する教育・研究プログラムのうち、学士課程（学部生）を対象とするものが「日本・インドネシアの農山漁村で展開する6大学協働サービスマーケティング・プログラム」（通称：SUJI-SLP）です。

SUJI-SLPではグローバルな視野を持ち、地域から持続可能な未来づくりに貢献するSUJIサーバント・リーダー（地域社会で献身的に貢献するリーダー）の養成を目的にしています。ここでは2023年2月27日から3月9日にボゴール農業大学で実施した「ベーシック海外サービスマーケティング」の様子を紹介します。

共通課題の存在を強く認識

参加者は高知大・愛媛大・香川大をあわせて10人、ボゴール農業大学の学生が30人です。実習地はインドネシア西ジャワのボゴールに位置する山間部にあるプ

ランテーションです。標高は1500メートルほどあり、インドネシアとはいえ肌寒い気候の中でプログラムを行いました。住民達は基幹産業である茶収穫のほか、コーヒー栽培、カフェ経営、エコツーリズムなど若者の定着と仕事の創出に取り組んでいました。

新興国・インドネシアでも急激な経済成長・グローバル化を背景として、地域社会にひずみが生まれつつあります。都市と農山漁村における経済格差の拡大、都市部への人口流出、海外からの安い農産物の流入など、これらは日本の農山村と共通の課題だといえます。

子供達との交流

